

コーチング、NLPを活用したインタビューの実践  
- 住民の潜在意識を掘り起こし、行動を促す手法として -  
Practice of the interview that utilized coaching, NLP

後藤眞宏\*、筒井義富\*、浪平 篤\*、常住直人\*、島武男\*  
Masahiro GOTO, Yoshitomi TSUTSUI, Atsushi NAMIHIRA,  
Naoto TSUNESUMI, Takeo SHIMA

## 1. はじめに

農業農村整備事業の推進において、地域住民の合意形成が求められるようになってきている。平成 19 年度から始まる農地・水・環境保全向上対策においても、ワークショップ手法などを活用して、地域住民自らが地域資源の管理項目を決定、実践する内容となっている。地域の合意を形成する際の重要なポイントは、住民の潜在意識を顕在化させ、それをいかに具体的な行動に結びつけるかにある。ここでは、歴史的利水施設の評価ならびにその活用を目的とした調査において、地域住民の意識の掘り起こしや合意形成に通じるインタビュー手法について著者らが実践した内容について報告する。

## 2. インタビューにおける実践的検討

歴史的利水施設として福岡県朝倉市の三連水車を対象に、昨年 6 月に開催された「ふれあいフェア」において、来場者（以下、被験者）にインタビューを実施した。インタビューは、1)導入部分（属性調査を含む）、2)これまでの三連水車との関わりと評価実態、3)三連水車の今後について、4)インタビュー後の感想、の 4 項目とした。

インタビューでは、自由回答を誘導する方法、すなわち被験者からの答えを待つ、被験者の内面（感情）に寄り添って、被験者と一緒に考える、ことを試みた。こうした手法は、コミュニケーション、意志決定などに用いられるコアクティブ・コーチング（以下、CC）<sup>1)</sup>、NLP<sup>2)</sup>注 1）意志決定を促す健康相談<sup>3)</sup>などで実践されている手法である。

## 3. インタビューの方法と内容

1) 導入部分では、単に性別、年齢、職業など属性を聞き取りだけでなく、これから実施するインタビューにおいて、被験者との信頼関係を構築する重要な時間と位置づけた。また、被験者の集中度を高め、意識を内面（自分）に向けるために、連想ゲームを実施した。ここでは、「柔道の田村選手から連想される言葉をいってください」と質問した。注 2）

2) 続いて、被験者が三連水車に対して、なにをもって素晴らしいと思っているのか、どんな体験が、どんな考えが、どんな価値観があるのかなど、被験者の内面深くにある感情を導くことを試みた。また、「もし三連水車がなくなったら」と仮定した質問することで、三連水車への思いの抽出を試みた。「もし～だったら」の設問は、NLP のスキルである「As if」を活用した。

3) 更に、これまでの質問で三連水車への思いが高まっている被験者へ「もし朝倉市の親善大使になったら三連水車をどのように PR しますか」と、今後の行動を抽出するための質問を試みた。これは健康相談の意志決定を促すスキルを活用した。注 3）

4) 最後に、インタビューを受けた感想を聞き出した。

---

\*農村工学研究所：National Institute for Rural Engineering インタビュー、コーチング、NLP

#### 4. 結果と考察

男性 29 名、女性 37 名の合計 66 名からインタビューが得られた。年齢、住所、職業を図 1 に示す。

1) 導入部分の属性調査の段階では、被験者からはインタビューに対する漠然とした不安感が感じられた。被験者に関連する質問や連想ゲームを通じて、被験者の視線が一点に集中する、動きが止まる等の反応からインタビューへの集中度が、増しているように感じられた。

2) 被験者の三連水車への捉え方は、力強い、風情がある、懐かしい、心が和む、先人の知恵、水の大切さを感じる、技術的にすごい、実用的など多岐にわたり、自由回答形式の質問の有効性が示された。また、もし三連水車がなくなったとしたらという未来をイメージする「As if」を用いることにより、朝倉＝三連水車、三連水車＝朝倉と捉えていること、特に朝倉市周辺住民にとって、地域活力の源・財産と捉えていることが明らかになった。このように施設の存在を否定する質問によって、どのように捉えているか、価値を感じているかなど、施設に対する住民の意識を評価することができることが明らかになった。

3) 2) 同様に「As if」を用いて朝倉市の親善大使になったとしたらの問いに対して、伝える、体感させる、広報する、交流するなど具体的な行動に関する回答が得られた。これは、三連水車の現状や思いを十分に感じている被験者に対して、親善大使という仮の状況を設定することによって、現状と「As if」でイメージした未来とのギャップを感じてもらうことで、ギャップを埋めるための具体的な行動が導かれたと考えられる。

4) インタビュー後の感想としては、「意外なことばかり聞かれた」、「自分で話すことで頭の整理になった」、「改めて三連水車の良さを言葉にすることで再確認した」、「自分の考えを伝えられて楽しかった」などであった。注 2) に示したような関わりを持ち、被験者の思いや感情に寄り添って問いかけ・投げかけを行うことによって、被験者自身の内部で大きな変化や新たな気づきが生まれることが明らかになった。

#### 5. おわりに

今回試みたコーチングや NLP を活用したインタビューの方法は、住民の潜在意識の掘り起こしや具体的な行動の導出、また日常の円滑なコミュニケーションや合意形成などに活かされるものと考えられる。何よりも、相互に信頼関係を築き、「答えは相手の中にある」と、質問者はそれを「引き出す手助けをするだけである」と、そして質問者は「住民の意識、感情と共にいる」ことが重要であると考えられる。

謝辞：本研究は、(独)農研機構 農村工学研究所交付金プロ「ソフト機能」の一環として実施したものである。関係者ならびに朝倉市、インタビューにご協力いただいた皆さんに記して感謝申し上げます。

参考文献：1) ローラ・ウィットワース他(2002)：コーチング・バイブル、東洋経済新報社、2)千葉英介(2003)：NLP 理論、明日香出版社、3)村田陽子(1997)：指導者である前に支援者であれ、ピーニングサポート・マナ 注 1) NLP (Neuro Linguistic Programming)、注 2) CC では、被験者の意識を内面に向けることで、自分の内面を深く探り、理解し、自分なりの答えを見つめる状態となり、質問者は被験者がこの状態を保つことが重要であるとしている、注 3) 飲酒や喫煙などの健康相談で、現状への感情を味わい、成りたい状態を想像し、両者のギャップを意識することで、自らの行動を決定させる手法

インタビュー 2日間 66名 男性29名 女性37名

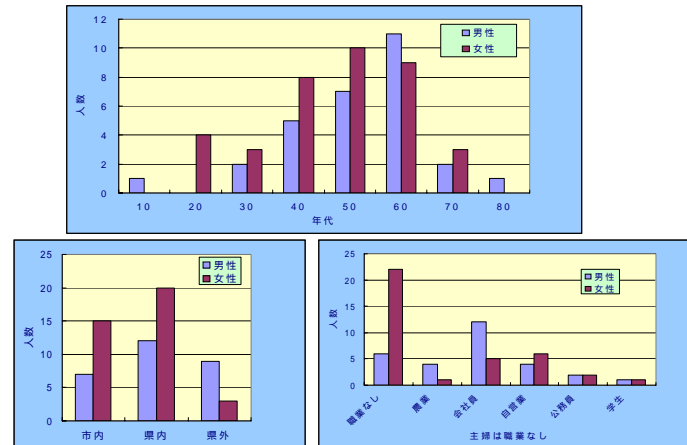


図 1 被験者の属性